



おたふくかぜワクチン

を受ける前にお読み下さい。

おたふくかぜ(流行性耳下腺炎, ムンプス)に自然感染したとき

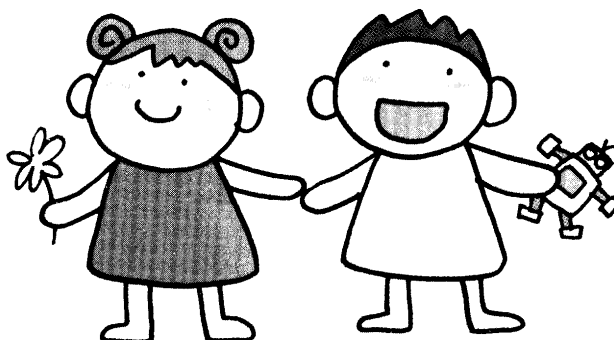
- おたふくかぜは, ウイルスによって起こる病気です。耳下腺, 顎下腺の腫れと発熱が主な症状で, 2-9 歳の頃にかかることが多く, 3-4 歳が最多です。潜伏期間は 2-3 週間で, 耳下腺が腫れる 7 日前から 9 日後くらいの間は, 人にうつす可能性があります。学校伝染病のひとつに指定されており, 耳下腺の腫れが消えるまでは, 登校・登園が禁止になります。
- おたふくかぜの合併症として, 無菌性髄膜炎が 3-10%に起こります。また, 難聴が数万人に 1 人程度起こります。男子が思春期以降にかかった場合は, 睾丸炎を併発することがあり, 男性不妊症を起こす心配があります。
- 流行期間中におたふくかぜのお子さんと接触して, 既に感染している場合があります。この場合には, 接種を受けても間に合わず, おたふくかぜの症状が出てしまうことがあります。

おたふくかぜワクチンの接種について

- おたふくかぜワクチンは任意接種で, 希望者だけが自費で接種を受けることになっています。
- 1 歳を過ぎれば接種できます。1 歳になったら直ぐに麻疹風疹ワクチンを, そのまた 4 週間後におたふくかぜワクチンの接種を受けることができます。ただし, 流行期にはこの限りではありませんので, 御相談下さい。
- おたふくかぜワクチンは生ワクチンですので, 接種後 1 カ月近くは体内で弱毒ウイルスが生きています。この間は, 副反応の発現や体調の変化に気をつけてください。

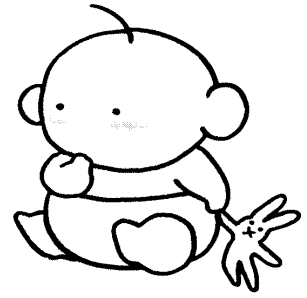
おたふくかぜワクチンの接種を受けた後の副反応

- 接種後 2-3 週間たった頃, まれに発熱, 耳下腺の腫れ, 嘔吐, せき, 鼻汁などを認めることがあります。一般に症状は軽く, 通常, 数日中に消失します。
- 自然におたふくかぜにかかった場合に比べて頻度は少ないですが, おたふくかぜワクチンによる疑いのある無菌性髄膜炎が接種後 2-3 週間頃にごくまれに発生することがあります。無菌性髄膜炎になると, 発熱, 嘔吐, 頭痛などの症状が出現します。このような症状が出現した場合には受診してください。通常, 2 週間前後で軽快, 回復します。



接種を受けてはいけない人

- 明らかに発病している人
- 重い急性の病気にかかっている人
- カナマイシン・エリスロマイシン(抗生物質)等の投与を受けて、アナフィラキシー(ひどいアレルギー反応)を起したことがある人
- 免疫不全の人
- 妊娠している人
- 接種前3カ月以内に輸血またはガンマグロブリン製剤の投与を受けた人
- 接種前6-11カ月以内にガンマグロブリン大量療法を受けた人
- その他、医師が接種に不適當な状態と判断した人

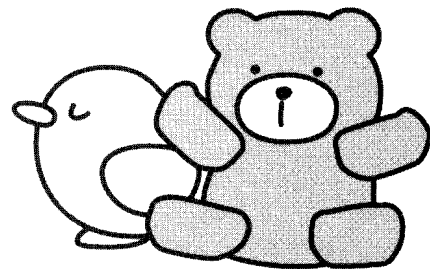


接種を受けるにあたって注意が必要な人

○上記以外に、医師が接種を行う際に、注意を要する人がいます。予診票は正確に記入し、からだに気がかりなことがある方はご相談下さい。

接種を受ける時の注意

- からだの調子がよい時に接種を受けてください。
- 元気がない、きげんが悪い、食欲がすすまないなど、ふだんと変わったことがあれば御相談下さい。このような時は無理をせずに、次の機会に接種を受けて下さい。
- 体温は家を出る前に測定してきてください。
- 「母子健康手帳」を接種日に持参してください。



接種を受けた後の注意

- 接種当日はいつも通りの生活でかまいませんが、激しい運動は避けて下さい。入浴は差し支えありません。
- 接種した部位は揉まないで下さい。押さえるだけで十分です。わざとこするのはやめましょう。
- おたふくかぜワクチン接種後4週間は他のワクチンを接種できません。

病気の後の予防接種までの期間

- 麻疹の治癒後4週間、風疹・水痘・おたふくかぜの治癒後2-4週間、突発性発疹・手足口病・伝染性紅斑などの治癒後1-2週間程度は、予防接種を受けない方がよいでしょう。疾病流行期はこの限りではありません。
- 上記疾患以外で高熱が出た場合には、1週間は予防接種を受けない方がよいでしょう。

